

先入観と思い込み

二〇二〇年十一月　　比護　秀美

如来の攝取不捨（えらばず　きらわす　みすてず）の心を学び
真実　自分自身のしたいこと　しなければならぬこと　できることを
他人とくらべず　あせらず　あきらめず　していこう

（竹中智秀師が大谷専修学院の学院生に向けた言葉）

コロナウイルス流行による外出自粛が緩和されてきた頃、気になっていたタイトルのドラマを観る機会を頂きました。カナダで制作され、二〇二〇年一月七日に放送された「アウトブレイク　―感染拡大―」というテレビドラマで、新型コロナウイルス感染症に伴うマスク不足による転売問題、誤情報に伴う人種差別など、取材に基づいた予測で作られた番組でした。

未知のものに対する恐怖。その恐怖から逃れようと不確かな情報を鵜呑みし、自身を正当化して、さまざまなものを差別し排除する、私たちのありさまが描かれています。このようなことはコロナウイルスだから起こったことではなく、私たちが持っている本性、潜んでいたものが表面に現われてきたのでしょう。自分が思い描いていないことに出遇うと、自分に都合良く生きるために、さまざまなものを圧迫したり、その存在を否定したり、傷つけたりしてしまいます。

私たちの出遇う現実は思い描いた通りになりません。自分中心に考えてしまうから、「見えていること」にも「見えていないこと」にも気付けないのではないのでしょうか。

十数年前、高田教区仏教青年会の企画で、ハンセン病と沖繩戦争について現地学習に行く機会をいただきました。訪れた中に、戦争と平和、差別をテーマに積極的に作品を制作されておられる、彫刻家の金城実さんのアトリエがありました。

私たちが快く迎えてくださり、一緒にお酒を飲みながら熱く語ってくださいました。それぞれに金城さんとお話する機会をいただき、私もその機会をいただきました。

話の脈略は覚えていないのですが、近くに置いてあった馬の銅像をテーブルに置き、「足は何本ある？」と問いかけられました。

深く考えることもなく、見たままに「四本ですね」と答えると、腕を組み、しばらく考え込んだあと、

「わしには三本しか見えん」とおっしゃいました。

そして、馬の銅像をゆっくり回し、ある角度で止められました。

なるほど、三本しか見えません。後脚が前脚に重なり、隠れてしまいました。

その後、金城さんはそのことに言及されませんでしたがおそらく、一つの事象も、角度を変えれば見え方が変わるように、一つの視点だけにとらわれず、多角的に見なくてはいけないと言われた気がします。

「見えていないこと」を、思い込みや自分の都合によって「見えていること」にし、自分が正しいと思いつまむがゆえに、周りに対し「目を覆い、耳を塞ぐ」。そのことで人を傷つけていても気付けない、そんな私のありさまを言い当てられた気がします。

私たちは、常に自分にとって「得か損か」「善か悪か」「快か不快か」で判断し、よりよい生活を求め、結果的に地獄を作り出してしまいます。蚕が繭を作り、自らを縛っている意識がないように、そのことに気付くことが出来ないのが私たちなのです。

あらゆるいのちと共に生かされていながら、えらんで、きらって、みすてる、如来のおこころとは真逆な生活をしている私たちに「真実（まこと）か虚偽（いつわり）か」と「いのち」から問われているのではないのでしょうか。

親鸞聖人は、そんな私たちの姿を「欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」

（『真宗聖典』五四五頁『一念多念文意』）と教えてくださいました。

如来のおこころを受け止め「これが私である」と気付かされたとき、自分のことだけではなく、さまざまなことから目をそらさない生き方が始まるのではないのでしょうか。

